
夜行バスのなかで

四二ヶ三 十三

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜行バスのなかで

【Nコード】

N3379P

【作者名】

四二ヶ三 十三

【あらすじ】

私がふと目を覚ましたのは、夜中だったのかもしれない。

わかることは闇が濃いことだけで、車内カーテンの袖から見えるのはぼくと光る街灯だった。（本文より抜粋）

私がふと目を覚ましたのは、夜中だったのかもしれない。

わかることは闇が濃いことだけで、車内カーテンの袖から見えるのはぼうと光る街灯だった。一番前の席だから、上部に光るデジタル時計を見れば何時なのか確認できるのだろうが、それを知ったところで眠くなるわけでも目的地までの距離が縮まる訳でもない。

長距離バスの利用は生涯で3年目になる。20歳という若さを考えればそれは当然だ、とまでは思わぬまでも、仕事の用事でしか札幌に向かう用事がない私には妥当な数字だった。

僕は気まぐれで上部に視線を移したが、デジタル時計はなかった。残念ながら3度ばかり乗車経験では時計の位置までは覚えていなかったようだ。

私は息を吐き、もう一度寝直そうとしたが、暗闇の中、こちらを伺う影が見えた。

いや。

これは顔だ。

少女然とした顔がこちらを振り向いていた。皆ががっくりと頭を垂れ寝ているのに、彼女は30分ほど寝てから起きたようなぼさぼさの顔（頭、ではない）をこちらを好奇の元でもあるかのように見ていた。

立派な20歳とはいえ、僕は霊的なものは怖い。怖いものは怖い。トイレに行けなくなるほどの恐怖はないが、寝付きが悪くなる程度の支障はある。振り向いている彼女にとってはいい迷惑だろうが、僕はそれを霊や何か説明のつかないものと考えるのが怖いので僕は見なかったことにして目を閉じた。

翌朝（といっても僕が一度夜中に起きた時に時間を確認していないので翌朝ではないのかもしれないが）、日の光が目的地まで近いことを主張していた。僕はそれをまぶたをきつく閉じることで、ぎりぎりまで寝られるよう措置をとる。

瞬間、添乗員の悲鳴が聞こえた。

首が、斬られている、首が…と話している。僕はふと、昨日不自然にこちらを見ていた少女を思い出す。まさか。怖い。僕は彼女ののっぺりとした顔を思い出す。あれが死人だとするなら、生き生きしすぎている気がしたが…。僕は睡眠と違うベクトルで目を閉じることを強いた。見てなるものか。

しかし、まだ話を聞いていると、どうやら被害者は男性らしいことがわかった。僕はひと安心してようやく目を開けたのだが、そのことで皆が驚き、急ブレーキを踏まれたので僕の意識は永遠に失われてしまった。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3379p/>

夜行バスのなかで

2010年12月6日05時23分発行